

民衆は意見をもつのか？

——フランス革命以前における言語学的・修辞学的イマジネールに関する考察¹——

シャルル・ヴァンサン（オー＝ド＝フランス工科大学）

（山上浩嗣訳）

序

公共の意見（世論：opinion publique）の研究は、20 世紀における西洋の政治哲学と思想史の考察に深い影響を与えました。今日では、メディア領域の劇的な変容やソーシャルネットワークの出現と結びつきながら、依然として重要な研究対象となっています。

日本はこの政治史から強く影響を受けた一方で、まったく異なる言語、世界観、社会観によって養われてきたように思われます。また私は、西洋修辞学の伝統である「修辞技法」（隠喩 *métaphore*、擬人法 *personnification*、換喩 *métonymie*）に注目しますが、これは日本における文体効果の発想とは大きく異なると思われます。さらに、日本語には漢字が存在するため、語源に関する問題も大きく異なるかもしれません。「公衆 *public*」や「意見 *opinion*」といった抽象語にも語源に具体性や感覚性がともなうからです。

私の考察はすべて、ひとつの逆説から出発しています。すなわち、集団を指す「公衆」が、どのようにして「意見」をもつことができるのか、という問題です。というのも、「意見」という語は、本来、個人の思考を指すからです。この問題については、二つの解釈が可能です。すなわち、ひとつは隠喩（*métaphore*）的に捉え、公衆をひとりの個人になぞらえる（*personnifié*）という解釈、もうひとつは換喩（*métonymie*）、より正確には提喩（*synecdoque*²）として、集団の意見である「世論」という語が、便宜的にその集団を構成する個々人の意見を指すとみなす解釈です。したがって私は、この問題を、哲学的、社会学的、科学的な観点よりもむしろ、言語学的・修辞学的・美学的な観点から考察しようとしています。

私が全体的な考察の枠組みとして提示する問いは、「公衆は意見をもつのか？ *Le public a-t-il une opinion ?*」というものです。この問いは、ユルゲン・ハーバーマスをはじめとする甚大な影響力をもつ思想家たちによって育まれてきた、世論に関する広大な研究領域のなかに位置づけられます。ここで注意すべきは、「世論 *opinion publique*」という概念と、「意見をもつ公衆 *un public qui possède une opinion*」という概念との間には、わずかなずれが存在する

¹ 著者のシャルル・ヴァンサン氏（Charles VINCENT, Université Polytechnique Hauts-de-France）は、2025 年 5 月 12 日に大阪大学豊中大学にて、「*« Le public a-t-il une opinion ? — Réflexions sur l'imaginaire linguistique et rhétorique avant la Révolution française »*」と題する講演を行った（大阪大学大学院人文学研究科フランス文学研究室主催）。本稿はその原稿（未公刊）の日本語訳である。なお、当日の通訳も訳者が担当した。

² [訳注] 部分で全体を、あるいは全体で部分を表す手法。

という点です。歴史的に言えば、フランスでは、これら二つの概念は、アンシャン・レジーム 旧体制 下において、「公共圏 *sphère publique*」や国家、新聞、サロンなどの発展とともに、並行して、同じ知的潮流のなかで誕生しました³。しかし「世論」という概念は、必ずしも直接的に「公衆の」あるいは「ある公衆の」意見を指すとはかぎりません。両者は、つねに対話を交わしながらも、それぞれに一定の自律性をもつという関係にあるのです。

私は18世紀、より正確にはその末期、フランス革命によって終焉を迎えるルイ16世の治世を研究しています。つまり、ヴォルテール、モンテスキュー、ディドロ、ルソー、ダランベールといった世代の啓蒙時代から、革命への移行期です。この中間期は、思想運動がいかんにしてフランス史上前例のない政治的事件へと結びついていったのかを理解するうえで決定的な時期です。本日のテーマに関しては、より具体的には、1762年にルソーが『社会契約論』のなかで提示した「一般意志 *volonté générale*」という理念が、1789年8月の『人権宣言』第6条において「法は一般意志の表現である」と明記され、革命の中心理念に据えられるまでの過程を理解することが課題となります。

革命前の動揺期というこの時期における「世論」をめぐる議論の研究は、画期的な一里塚であり、それは、「一般意志」という概念そのものの研究よりもむしろ重要です。というのも、「一般意志」という言葉は、革命期に至るまで議論のなかであまり使用されなかったからです。文学はここで重要な役割を果たします。すなわち、世論に浸透していくさまざまな理念を演出し、意見が次第に重要性を増していく「公衆」を形成し、公衆とその情念を描き出すことによってです。王権神授説に基づく絶対王政のもとで、政治的表現の自由や国民代表制は存在しませんでした。そんななか、演劇やオペラは、アカデミー・フランセーズと同様に、意見を表現する場となっていきました。

フランス革命直前には、どのように「世論」について語られ、その役割や統一性がどのように認識されていたのでしょうか。また、言語はどの程度まで、こうした議論を反映し、さらには部分的に組織していたのでしょうか。

まず最初に、18世紀のヨーロッパにおける「世論」の出現に関する哲学的・歴史的な考察の枠組みに立ちもどります。次に、1784年のレチフ・ド・ラ・ブルトンヌの小説に見られる、世論と公衆に対するきわめて否定的なイメージに注目します。彼が提示する、公衆に対するきわめて批判的な根本的判断、そして公衆のイメージの複雑な修辭的表現について、そしてそうした表現が、公衆について語る際の一般的な言説とどのように結びついているかを考察します。最後に、これとは対照的に、より肯定的で楽観的な公衆像が、革命とともに民衆に与えられることになる政治的役割を準備していったことを示したいと思います。

³ フランスでは近年、この公共圏の発生条件に関する研究は、アントワヌ・リルティの次の著作を生み出した。Antoine Lilti, *Le monde des salons, Sociabilité et mondanité à Paris au XVIII^e siècle*, Paris, Fayard, 2005 ; *Figures publiques, l'invention de la célébrité, 1750-1850*, Paris, Fayard, 2014.

1. ハーバーマスと世論に関する考察

1962 年、ドイツのフランクフルト学派の哲学者ユルゲン・ハーバーマスは、『公共性の構造転換⁴』と題する著作を発表し、西洋の近代政治における「公衆 public」という概念の出現とその重要性を分析しました。

ハーバーマスの思索は、無から生まれたものではありません。一方にはマルクスとフランクフルト学派があります。フランクフルト学派は、とくに第二次世界大戦の惨禍を経て、啓蒙思想や西洋の合理主義に対してきわめて批判的な立場を取るようになっていました。人々は悪の根源、すなわち、狂信化した大衆がいかにして悪魔的な独裁者たち^{フューラー}に従ったのかを理解しようとしていたのです。ハーバーマスもまた同様に批判的ですが、先人たちほど悲観的ではありませんでした。

他方には、近代政治における推進力としての「世論」に関する分析の流れがあります。これは、トクヴィル（『アメリカのデモクラシー』1835–1840 年⁵）から、ガブリエル・タルド（『世論と群衆』1901 年⁶、ここでタルドは群衆 *foule* と公衆 *public* を対置しています）、さらにはジョン・デューイ（『公衆とその諸問題』1927 年⁷、ここでは複数の公衆 *publics* が区別されます）に至るまで続いてきました。しかし、ハーバーマスにとって決定的な引き金となったのは、1958 年にハンナ・アーレントが公共圏（*espace public*）について行った考察でした。アーレントの出発点は、エマニュエル・カントの研究でした。彼女は『人間の条件⁸』において、カントの『世界市民的観点から見た普遍史の理念⁹』（これは 1784 年、まさに私たちが扱っている時期の刊行）における私的空間と世界的公共空間との対比を参照しました。

ハーバーマスにとって、世論の形成における決定的な瞬間は、啓蒙期と革命の間のまづはイギリスにおいて、そしてその後、とくにフランスにおける文学的・ジャーナリズム的な領域のなかに位置づけられます。当時、政治的討論がほとんど不可能だった（絶対王政、検

⁴ Jürgen Habermas, *Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Neuwied am Rhein / Berlin, Luchterhand, 1962. [訳注] ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究』細谷貞雄、山田正行訳、未来社、1973 年／〔新版〕未来社、1994 年。

⁵ Alexis de Tocqueville, *De la Démocratie en Amérique*, Paris, Gosselin, 1835 (Première partie) et 1840 (seconde partie). [訳注] トクヴィル『アメリカのデモクラシー』松本礼二 訳、岩波文庫、全 4 冊、2005-2008 年。

⁶ Gabriel Tarde, *L'Opinion et la foule*, Paris, Félix Alcan, 1901. [訳注] ガブリエル・タルド『世論と群衆』稲葉三千男訳、新版、未来社、1964 年。

⁷ John Dewey, *The Public and its Problems*, Denver, Alan Swallow, 1927. [訳注] ジョン・デューイ『公衆とその諸問題』植木豊訳、ハーベスト社、2010 年。

⁸ Hannah Arendt, *The Human Condition*, University of Chicago Press, 1958. [訳注] ハンナ・アーレント『人間の条件』志水逸雄訳、ちくま学芸文庫、1994 年。

⁹ [訳注] カント「世界市民的観点から見た普遍史の理念」、『永遠平和のために／啓蒙とは何か 他 3 編』中山元訳、光文社文庫、2006 年、所収。

関など）状況下で、政治はこうした領域のなかで形づくられ、考察されていたのです。哲学者たちは、とくに文学という迂回路を用いて、権力から自立した世論、権力に対する均衡、対抗力となる世論を生み出し、表現し、影響を及ぼす方法を創出しました。その際、哲学者たちは、とりわけモンテスキューの「権力分立 *équilibre des pouvoirs*」と「国民精神 *esprit des nations*」に関する思想の影響を受けました。ハーバーマスにとって、この最初の時期には、真の意味での「世論」が存在し、理性的な議論の交換が行われていたとされます。ところがその後、マスメディア、資本主義、ブルジョワジーがこの空間を利用して世論を操作するようになったと彼は見ています。したがって彼の哲学全体は、理性的で包摂的な公共空間の可能条件を探り、再発見しようとする試みとなりました（そのため、合理性を本質的に抑圧的なものとみなすアドルノやホルクハイマーほどには、ハーバーマスの態度は悲観的ではないのです）。

ごく最近、1929 年生まれで今や超高齢のハーバーマスは、かつての 1962 年の著作 [『公共性の構造転換』] を、SNS やインターネット時代に照らしてアップデートした対談集を出版しました¹⁰。しかし、やや残念なことに、大筋では彼は同じことを語っています。まるで、彼の分析は、私たちの民主主義が直面してきた課題の継続性を見ぬくことができて、新たな状況への対応策を見出す力はもはや失われているかのようです。とはいえ、現在、米国において巨大 SNS 企業（GAFAM）と強権的な政治権力が結託しつつある状況下では、ハーバーマスはなおいっそう、みずからの政治哲学を通じて、ヨーロッパ型社会民主主義の固有の声を体現しているように見えます。彼は過去五十年間にわたって、哲学者としてこの社会民主主義の確立に大きく貢献してきましたが、今日それが危機に瀕しています。

ハーバーマスの哲学全体は、啓蒙思想の企図を継承し、現代化し、改善することを目指しています。とりわけ、カントの道徳的普遍性（*l'universel moral*）を、市民間の理性的で間主観的な討議を通じて、広く共有し、客観化しようとしています。いわば、ハーバーマスはドイツ啓蒙の理性的普遍性と、フランス啓蒙の世論とを融合させようと努めているのです。彼はこの理想に対して二つの重大な問題を見ています。すなわち、特定の集団による世論の独占、そして、20 世紀におけるマスメディアや、今日における SNS による世論の操作です。その結果、公衆はもはや啓蒙された意見ではなく、操作された意見しかもたなくなります。公衆は、もはや民主主義の柱ではなく、資本主義や危険な人物たちの盲目的な操り人形と化してしまうのです。

世論をめぐる議論とその意義

¹⁰ *Espace public et démocratie délibérative : un tournant*, traduit de l'allemand par Frédéric Joly, traduction de : *Ein neuer Strukturwandel der Öffentlichkeit und die deliberative Politik*, Paris, Gallimard, 2023.

ハーバーマスの 1962 年の著作 [『公共性の構造転換』] は、いろいろな分野の第一線の研究者たち、とくに啓蒙時代や文学の専門家たちによって、大量の研究が生まれるきっかけになりました¹¹。また、演劇の専門家たちは、論議のなかで「公衆」というテーマを取り上げ、「世論 *opinion publique*」と「公衆 [観客] の意見 *opinion du public*」との関係¹²を示しました¹³。革命の直前には、演劇や文学作品における「公衆」という問題には、考察に値するきわめて強い秘められた政治的な意義がありました。先ほども述べたように、政治的な検閲が芸術と政治を近づける役割を果たしていました。しかし、それだけではありません。当時のフランスは古典古代の読書文化に育まれた文芸共和国であり、ギリシアの都市国家で演劇が果たしていた重要な公共的役割が注目されていました。古代ギリシアでは、議論を通じて、人々の意見や感情を共有する共同体の形成が行われていたからです。

このように、「公衆」や「世論」についての考察は、1762 年にルソーが『社会契約論』で提唱した抽象的な「一般意志 *volonté générale*」の、準備段階の実験室、その具体化の役割を果たし、さらに言えば、不完全ではあるものの必要な代替物にもなっていました。こうした議論は、フランス革命前夜を通じて行われましたが、今日のフランス、そしておそらく他の国々でも、再び現代性と緊急性を帯びてきています。たとえば、「黄色いベスト運動」[2018 年 11 月～2019 年初頭が最盛期] では、「一般意志」の政治的代議制そのものが問い直されました。他方、強権的な政権が復活し、一人あるいはごく少数者の意志が優先されるような状況が再び目立つようになっています。私たちの政治についての暗黙の合意事項を長期的に形づくってきたこうしたさまざまな問題について、今あらためて考え直すことが、必要になっているのです。

私は、この問題を哲学、歴史、言語学の交差点で考えてみたいと思います。ここでは二つの問題が立ち上がります。まず第一に、公衆とはひとつの集団ですが、そんな集団がどうして一つの「意見」をもつことができるのかという問題。そして第二は、「公衆」はそれぞれ異なる意見をもった個々人の集まりでもあるという問題です。これらの問いは、革命の前から盛んに議論されていました。一部の著者や批評家たちは、「公衆の意見 *opinion du public*」

¹¹ なかでもとくに、モナ・オズフによる次の重要かつ総括的な一章を挙げておこう。Mona Ozouf, « Le concept d'opinion publique du XVIII^e siècle », dans *L'Homme régénéré. Essais sur la Révolution française*, Paris, Gallimard, 1989, p. 21-53. また、ロジェ・シャルチエによる考察 *Les Origines culturelles de la Révolution française*, Paris, Seuil, 1990 [『フランス革命の文化的起源』松浦義弘訳、岩波書店、1994 年] に加えて、アルレット・ファルジュの著 Arlette Farge, *Dire et mal dire, l'opinion publique au XVIII^e siècle*, Paris, Seuil 1992、および、とりわけ、マイケル・キース・ベイカーの著 Michael Keith Baker *Au tribunal de l'opinion, essais sur l'imaginaire politique au XVIII^e siècle*, Paris, Payot, 1993 も参照。

¹² [訳注] 後に説明があるが、「世論」は「公の領域」で議論され、影響力をもつ抽象的な力や原理のことであるのに対して、「公衆の意見」は、「劇を観た観客たちの意見」や「小説を読んだ一般読者たちの意見」といった、より実感的で現場的なもの。

¹³ たとえば、次を参照。Martial Poirson : « Multitude en rumeur: des suffrages du public aux assises du spectateur », *Dix-huitième siècle*, n° 41, 2009, p. 222-247.

という考え方に懐疑的でしたが、逆に、それを集団との新たな関係の可能性の具現化とみなす者もいました。これから、友人同士でもあった二人の作家——ニコラ・レチフ・ド・ラ・ブルトンヌとルイ＝セバスチャン・メルシエ——を例に、この対照的な二つの見方を順に見ていきたいと思います。

II. レチフの怪物

2.1. このイメージの出現の背景

レチフ・ド・ラ・ブルトンヌは、1780年代に成功を収めた作家です。彼は公衆に対してかなり否定的な意見を抱いていますが、文学作品のなかで、公衆がいかに怪物的で逆説的な存在であるかをとくに強調しています。その作品中では、小説、演劇、理論的な言説が交錯しています。

レチフは小説を中心にきわめて多産な作家です。プロの批評家たちからはやや軽んじられていましたが、大衆にはとても人気がありました。彼は、書簡体小説『墮落百姓娘』（*La Paysanne pervertie*, 1784）のなかで、演劇の観客（公衆）（*le public de théâtre*）に対して痛烈な批判的肖像を描いています。この作品は、彼女の兄を主人公とする（彼女本人も登場しますが）『墮落百姓』（*Le Paysan perverti*, 1775）の続篇であり、さらにさかのぼれば、マリヴォーの有名な小説『成り上がり百姓』（*Le Paysan parvenu*, 1734）を改作したものです。物語は、ユルシュルという田舎娘の墮落を描いています。彼女はすでにパリに出ていた兄エドモンを追って上京します。最初は品行方正に行動しますが、思考方法からして彼女が素行不良に陥る予感を抱かせます。彼女はある侯爵にだまされて妊娠し、結局彼と結婚しますが、彼女の墮落には終わりがなく、やがて高級娼婦、ついで売春婦になり、あらゆる虐待を受けた末に、悔い改めて故郷にもどります。

物語の核心部分で、彼女は世俗的な高級娼婦としての成功から、賭博や虐待に墮落しますが、その際、彼女を転落させた自由思想の哲学者ゴデという人物が、彼女が女優になるのを阻止しようし、演劇に対して罵倒をはじめます。ところが、手紙 124 では、彼女が金を得るためにさらに悪い道に堕ちる危険を冒すのを目にして、前の手紙とは正反対のことを説き、演劇を称賛します。しかし彼は、演劇の実践に対してなお大きなためらいを抱きつづけています。それこそが、公衆の態度なのです。

だが、たとえ私が劇作家たちを称賛するとしても、観客たる公衆を称賛することは絶対にしない！ なんていうことだ！ 才能ある者たちが、[頭を使わない] 自動人形のような存在に裁かれるとは！そして彼らの喝采を呼び起こすことが、いかに虚しいことか！私が最後に名前を挙げたあの才人たち [劇作家たち] が、どうしてこの千の頭をもつヒュドラ——しかもその一つとして意見が一致しない——のために苦心する気

になれるのか！私は立見席、パルケ（舞台前席）、ロージュ（栈敷席）、果てはアンフィテアトル（円形階段席）まで行ったことがある。アンフィテアトルと演目の関係は、ちょうどマレ地区とサン＝トノレ通りの関係だ¹⁴。そこで私は、馬鹿げたものが美しいものと同じように賞賛されるのを聞いたし、崇高な場面がけなされるのを聞いた。俳優の欠点が賞賛され、その美質——感情をこめた演技に見られる知性や繊細さや節度——が嘲られるのを見た。だが君は言うだろう、「それでも公衆は正しく判断しているではないか！」と。たしかに、判断しているのはせいぜい二つか三つの頭にすぎず、ときには一つの頭にすぎない。そいつらが「公衆」と呼ばれるこの巨大な獣を動かすきっかけを与えているのだ。しかも、そうなるには、その二人、三人、あるいは一人が、あらかじめ芝居を読んでいなければならない。なぜなら、初演ではまともに芝居を理解するのは不可能だからだ。この息も絶え絶えの太っちょの馬のような「公衆」というやつは、**咳をし、痰を吐き、鼻をかみ、手を打ち、いななき、がなり立て、吠え、鳴き声をたて、めえめえ鳴く**——それぞれの頭が属する動物の種類に応じて、とぎれることなく。この「公衆」には、楽しむための才覚すらない。というのも、自分で自分の楽しみを奪いつづけているのだから。そんな太った愚鈍な獣に、判断ができるとでも思うのか！... この「公衆」がまともな判断力をもっていないことはあまりにも明かだ。そして、美しいものに拍手を起こさせる「伝染する電気のような動き」にも、原因がないかもしれないのもまた真実だ。実際、「公衆」は明らかな馬鹿げたものに拍手を送ったことがある。それは、その日においては、この**巨大な巢** [「公衆」のこと] に「女王蜂 *âme reine*」がいなかったからだ。つまり、千の頭のうちのひとつたりとも、まともな常識を備えていなかったということだ。そして翌日、あるいは一週間後に、巢には「女王蜂」が現れ、電氣的な伝染現象が起こった。すると今度は、かつて称賛したものを罵倒しはじめるのである¹⁵。

この一節は、一見すると物語の筋から完全に切り離されているように見えます。まるで劇評家や演劇理論家による新聞記事のようにも思われるかもしれませんが。しかし、これまで見てきたように、実際には、主張が小説の筋に、なんらかの説得力をもって、結びついています。つまり、著者はここで、小説を口実にして読者に「公衆とは何か」という教訓を与えようとしていることが感じられます。ルソーの『新エロイズ』——レチフが手本とした作品のひとつ——では、登場人物たちの哲学的・論争的な議論が、つねに筋のなかに巧みに織

¹⁴ [訳注] アンフィテアトルは劇場内の最上段の安い席で、庶民が見る席。マレ地区は庶民が住む界隈。サン＝トノレ通りは上流階級の人々や文化人が集う地区。

¹⁵ 『墮落百姓娘』第三部。 *La Paysanne pervertie ou les dangers de la ville, troisième partie*, La Haye et Paris, 1784, p. 289 et suivantes. (nous soulignons et mettons en gras).

りこまれていましたが、それとは対極的です。レチフは器用なようで、結局はそうでもないのです。

レチフは、みずからの見解を、悪魔的な人物の口を借りて語らせていますが、しかしそれはまぎれもなく彼自身の見解です。というのも、彼は数年後、『パリの夜』という作品を刊行し、その作中で彼は、夜の散策を通して首都パリの雰囲気を描き出しつつ、ある「公衆殿下 Monseigneur le public」に語りかける形で、再びほぼ同じことを述べ、公衆のあらゆる欠点を非難しているからです¹⁶。

2.2. 一つになった三つの公衆のイメージ

この公衆のイメージは複雑です。なぜなら、複数の隠喩的なネットワークがぶつかり合い、融合しているからです。また、ここで扱われているイメージのネットワークは、決して新しいものではありません。つまり、暗黙のうちに間テクスト性が働いています。たとえば、「ヒュドラ（多頭の怪物）」は、少なくともフルティエール以来、反乱を起こす民衆を表す慣習的なイメージであり¹⁷、その後、啓蒙主義の哲学者たちによってカトリック教会批判にも用いられるようになりました¹⁸。しかしここでレチフは、そのような[啓蒙主義]哲学者による論争以前の段階にとどまり、すでに古代に見られた「反乱を起こし手に負えない民衆」としてのヒュドラという元来の政治的な表象に立ちもどっています。

レチフは道德改革のための企画書たる『アンドログラフ』において、ラ・フォンテーヌの寓話を参照しながら、政治的ヒュドラについて暗に言及しています。その寓話は「多頭の竜と多尾の竜」と題されており、力はただ一つの頭によって与えられる秩序と指導に由来するとされています。レチフは、おそらく同時代にこのイメージが頻繁に使用されていた文脈を離れて、この寓話を念頭に置いていたと思われます。しかし、より直接的には、レチフは彼の友人で劇作家でもあったメルシエに影響を受けているようです。メルシエは、このイメージを政治的・思想的領域から演劇論争に移行させたのです。

公衆に関するこの最初のイメージは、さらにいくつもの別のイメージ——動物小屋、家畜の群れ、蜂の群れ——がからみ合うことで、複雑になっています。ここではこれらのイメージの政治的な参照物のすべてには立ち入りませんが、蜂を例にとってみましょう。蜂は、

¹⁶ *Les Nuits de Paris, ou le Spectateur nocturne*, tome 6, onzième partie, Londres, 1788, p. 2655. これ以前にメルシエはすでに、同様の趣旨に基づき、『パリ情景』の一章として「公衆殿 Monsieur le Public」と題する章を構想していた(*Tableau de Paris*, Nouvelle édition corrigée et augmentée, tome sixième, Amsterdam, 1783, p. 177, chapitre DXXXIII)。

¹⁷ 「民衆の反乱や、訴訟沙汰など、滅ぼしたと思ってもそのつど甦るものを、象徴的に〈百の頭をもつヒュドラ une hydre à cent testes〉と呼ぶ」（フルティエール『万能辞書』、*Dictionnaire universel*, volume 3, La Haye et Rotterdam, Arnout et Reinier Leers, 1690, p. 672）。

¹⁸ Elena Giorza, « Pensare per metafore: l'hydre e l'albero nella guerra civile tra gli increduli », *Diciottesimo Secolo*, Vol. 5, 2020, p. 117-126.

もともと自然な社会の安定的な階層構造を表す伝統的なイメージ（アリストテレス¹⁹）でした。しかし 18 世紀になると、マンデヴィルの『蜜蜂の寓話²⁰』以降、このイメージは政治的議論のなかで逆説的に反転します。マンデヴィルは、ならず者によって成り立っていた社会に突然美德が押しつけられ、その結果、各人に力と繁栄を与えていた自由が失われ、社会が完全に崩壊するさまを描き出しました²¹。

レチフは、公衆を「怪物のような人物」として捉えることを提案しています。つまり、分裂し、互いに対立する複数の人物の集合体としての一人物です。そのために彼は、おぞましくも滑稽な造形を用いています。さらにレチフは、公衆を怪物化するだけでなく動物化するように、さまざまな隠喩を駆使しています。こうして、公衆はもはや真に一つの意見をもつのではなく、千もの意見——しかも知的な判断ではなく、非理性的な見解や動物的な情動——をもつ存在となってしまうのです。

2.3. 「怪物としての公衆」対「人物としての公衆」

このようにレチフは、当時（そして現代においても）最も一般的で最も作為のない言語を用いながら、集合体を語る際の慣習的なありかたを解体しています。たとえば、1784 年の新聞を見ても、「公衆の判断」という表現が頻繁に登場し、あわせて、公衆をひとりの個人、あるいは審判者として——いわば無意識的に、また慣習的に——描き出す一連の語が用いられています。

1. ざわめきはひどく激しかったが、観客（public）が**落ち着き**を取りもどし、彼女[女優]が交代することを**知**ると [...], 拍手喝采が巻き起こった。
2. 観客（public）は劇場を出ながら**言**うだろう。「いやあ、素晴らしいお年玉だ！ (...)**彼**らは作者を**呼**び出し、作者は謙虚に姿を現した。
3. 新しい作品に対して**寛大**な観客（public）が**敬意**をもって示してくれた歓迎...
4. 観客（public）はきっと**喜**んで**知**ることになるだろう...

¹⁹ ホブズは、アリストテレスが人間の政治的機構をミツバチやアリの政治的機構にたとえたことを批判している。cf. Jean Terrel, *Hobbes, matérialisme et politique*, Paris, Vrin, 1994, p. 197.

²⁰ Bernard Mandeville, *The Fable of the Bees, Or, Private Vices, Publick Benefits: Containing, Several Discourses, to Demonstrate, that Human Frailties, During the Degeneracy of Mankind, May be Turn'd to the Advantage of the Civil Society, and Made to Supply the Place of Moral Virtues*, Londres, J. Roberts, 1714.

[訳注] バーナード・デ・マンデヴィル（Bernard de Mandeville, 1670 - 1733）は、オランダ生まれのイギリスの精神科医で思想家（風刺、散文）。主著『蜂の寓話 私悪すなわち公益』（*The Fables of the Bees: or, Private Vices, Public Benefits*）は、多くの思想家に影響を与え、思想史、経済史などで重要な位置を占める。

²¹ [訳注] マンデヴィルによれば、「個人の悪徳は、社会の利益を生む」。逆に、美德が強制されると、私利私欲が抑制され、自由・競争・消費といった社会の推進力が失われ、結果として社会は弱体化し崩壊する。

5. 私は、無名の若者を紹介したことで観客（public）が私に感謝してくれると信じている²²。

上記の大部分の引用において、公衆を集团的で均一なものと理解するか、個別化して理解するかの間で揺れ動いています。さまざまな認識を示す動詞（判断する *juger*、理解する *comprendre*、焦れる *s'impatients*、など）が、公衆を一人の人間のように存在させようとする傾向をもっており、形容詞や補語なども同様です。これは取るに足らない、ごくありふれた言語の用法ですが、それにより、公衆はまるで一個の人格であるかのような、ほとんど意識されない背景が確立しています。そして、ときには本当に発話能力をもった人物になることさえあります（例 2）。ここでは、準隠喩（*quasi-métaphore*）が死に、溶けて換喩（*métonymie*）に変化する様子——つまり、公衆の統一性がその構成員たちの多様な個別性のなかに吸収されていく様子——が見られる一方で、逆に、一人の人物として再活性化される場合もあります。

例 2 においては、換喩によって、公衆の発言とはその構成員たちの発言であり、「観客たち *les gens du public*」といった複数形の表現に置き換えることも可能だと考えることができます。しかし、同じ 1784 年の『ジュルナル・ド・パリ』には、ある作者と「公衆」との間の対話の一節が報告されています。これは、おそらくグリモ・ド・ラ・レニエールによって書かれたものです。彼は啓蒙時代と革命の間に位置する世代に属する、奔放な文人・ジャーナリストの一人で、美食への嗜好と数々の放埒な逸話で知られています。

次はその冒頭部分です。

第二の対話

作者と公衆

公衆——こんにちは、独身紳士どの。お世話になっております。

作者——ああ、どうかお許しください、お願いします。

公衆——何をです？

作者——冷やかしの口調はご遠慮願いたいのです。われわれの間では、あまりに力が釣り合わないでしょうから。

公衆——ここで武器や戦いの話をするとは何ごとですか？私はあなたに会いに来たのであって、説教をしに来たわけではありませんよ。

作者——だんな様、あなた様からであれば、どちらであっても喜んでお受けいたします。私の手紙は届いておりますか？

²² *Journal de Paris*, année 1784. 1-4 の出典はそれぞれ下記の通り。1. Numéro 53, 22 février. 2. Numéro 6, 6 janvier. 3. Numéro 9, 9 janvier. 4. Numéro 12, 12 janvier. 5. Numéro 22, 22 janvier（公衆の擬人化を示す語を太字で記した）。

公衆——どの手紙のことですか？

作者——もちろん今朝の手紙ですよ。まさか、私は毎日あなたに手紙を送る習慣でもあるとお思いですか？

公衆——それは知りません。

作者——あなたほどの有名人なら、手紙を途中で奪われても仕方ありませんよ²³。

公衆は一人称単数で発言し、「ムッシュー（だんな様）」という敬称を与えられ、「有名なお方」とまで形容されています。ここでは、もはや提喩 [部分で全体を表す表現] による解釈をもち出すことはできません。公衆は、純粹かつ単純な擬人化によって、一つの存在に変えられているのです。このイメージは、ほとんど濫喩 [カタクレシス]（たとえば「椅子の足」のように、もはや隠喩として意識されない死んだ隠喩）に近い用法に焦点を当て、その [公衆を一つの人格とみなすという現象の] ふだんは意識されない意外さにあえて注目させることで、目立たせようとしています。

このように、公衆の擬人化は、ひとつの言語的・修辭的現象のように見えます。それは、イメージの生き生きとした度合い、あるいは逆にその知覚の消滅の度合いに応じて作用するのです。レチフはこの擬人化を引き継ぎ、それを怪物的なものへと変化させます。公衆という人格を動物的なものにし、ありえない存在、つまり、単一化に至ることのない集合体に仕立て上げるのです。こうして隠喩は再び単なる提喩へともどります。それでもなお、集団はひとつの存在でありつづけるのです。まるで、集団的人格というイメージは、決して完全には消滅しえないかのように²⁴。

このように、「公衆」という語や、その他多くの集団を表す名詞（とりわけ「民衆 *peuple*」）の使用が、集団の擬人化 [隠喩] と、その構成員の態度を示すための提喩との間を揺れ動いていることがわかります。また、それら二つの修辭技法を重ね合わせるプロセスを通じて、私たちの理解はほとんどつねに両者が混じり合っています。このプロセスは、近年では認知言語学によって「メタフトニミー *métaphtonymie*」（隠喩的提喩）（=*métaphore* [隠喩] + *métonymie* [換喩]、換喩はしばしば *synecdoque* [提喩] と同一視されます）と呼ばれるようになっていきます²⁵。この操作において、私たちの美的想像力や政治的想像力を最初に操作するのは、まさに言語そのものです。すなわち、ジャーナリズムの言葉から日常生活の言葉に至るまで、私たちが最も普通に用いる言語が、私たちの意識のなかに、言いか

²³ *Réflexions philosophiques sur le plaisir par un célibataire*, troisième édition, Lausanne et Paris, Duchesne, Le Jay, Bailly, Esprit, Pichard, Petit, 1784, p. 50. この引用は 1784 年 3 月 30 日付の『ジュルナル・ド・パリ』90 号に掲載後、上記著作（第三版）に収録。

²⁴ [訳注] *public en métaphore* = une personnification pure et simple (ex. Monsieur le public)

public en métonymie = un collectif qui n'arrive pas à faire unité

²⁵ Cf. Louis Goossens, « Metaphtonymy: The interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action. », *Cognitive Linguistics*, vol. 1, no. 3, 1990, p. 323-342.

えれば、私たちの社会や政治に対する理解の無意識的な構造や、私たちの集合的表象のなかに、きわめて不確実な要素を存在させているのです。

レチフの抜粋では、「電気」という別のイメージにも言及されています。これは、十年ほど前にフランクリンの発見によって流行し、さらに近い時期ではメスメル²⁶の磁気学によって注目を集めたものでした。そして、ここにおいて劇場の観客 [=公衆 public] という存在が、集団の統一性についての考察において、ある要素をもたらしているように見えます。後にギュスターヴ・ル・ボン²⁷以降の群集心理の専門家たちが考察することになるものです。それは、集団のなかにときおり生じるらしい、意識の一致、すなわち、公衆全体がひとつに共鳴し、真に「集団的」な感情を共有するかのように見える現象なのです。

III. メルシエ：審判と電気の火

それより十年前、メルシエもまた、公衆の判断、より正確には彼が「民衆 *peuple*」と呼ぶ大衆の判断について考察していました。彼は電気については語らず、より伝統的な「火」のイメージを用いています。

群衆がなだれこんで劇場の栈敷席 (*loges*) を埋め尽くすとき、民衆 (*peuple*) の膨大な集まりが、気力を失っている俳優を奮い立たせ、劇に新たな熱気をもたらすだろう。大勢に鼓舞されて、俳優はこの全体の情動から生まれる火を感じ、育むことに、いっそう努めるようになるだろう。そのとき [...] 観客たちは涙を流し、その涙が一致して流されるとき、それはいっそう甘美なものとなるだろう。誰ひとりとして、この共感の矢から逃れることはできない。この共感、自己愛 (*amour-propre*) や個人的利益 (*intérêt personnel*) といった狭い視野をはるかに超える力をもっている。人々が派閥に結集し、素早く同じ主義を掲げ、圧政を守る障壁を打ち破ろうと身を投げ出すのと同じように、心は同じ思想に向かって一斉に駆け出し、それを受け入れ、それで満たされていくだろう²⁸。(メルシエ『演劇について』)

レチフが強調した、[公衆の] 意見の愚かさや分裂という考え方に対して、メルシエは逆に、劇場における民衆の判断の正当性と統一性、そして共有された感情における一致を前面に押し出しています。ここでは、単なる集団の統一性についての比較 [劇場内の民衆の感情

²⁶ [訳注] フランツ・アントン・メスメル/フランツ・アントン・メスマー (独: Franz Anton Mesmer, 仏: Frédéric-Antoine Mesmer, 1734 - 1815) は、ドイツ人の医師。動物磁気説 (*magnétisme animal*) の提唱者。

²⁷ [訳注] シャルル＝マリー・ギュスターヴ・ル・ボン (Charles-Marie Gustave Le Bon, 1841 - 1931) : 『群衆心理』桜井成夫訳、講談社学術文庫、1993年。

²⁸ Mercier, *Du théâtre*, Paris, Amsterdam, Van Harrevelt, 1773, p. 214-216.

の一致と、政治運動における民衆の行動の一致の比較]にすぎないなかにも、「圧政 tyrannie」に対する政治的な示唆が最後に見てとれますが、それは偶然に選ばれたものではないように思われます。

劇場という空間の地理的一体性に関わる要素は、決定的なものです。ひとつの同じ場所に共存することが、こうした感覚的かつ知的な共鳴という驚くべき効果を生じさせています。そして、これはルソーの政治理論においても決定的な要素です。彼は小規模なギリシア都市国家やジュネーヴ共和国のように人々が直接集まることのできる共同体とは対極にある、過度な大国には警戒を抱いていました。興味深い逆説は²⁹、ルソーが政治における「代表 représentation」という概念に反対していたことです。彼は、市民の現前と、都市の公共生活への直接的な参画を重んじていたのです。しかしここでは、民衆は劇場の「上演 représentation」のために集まっており、しかもルソーはこの種の劇場上演にも疑いの目を向けていたのです。いずれにしても、ここに私たちは一つのイメージのズレ (hiatus) ³⁰を見ることができます。それは、個人から始まり、劇場の観客という集団を経て、最後には、言葉の威光によって統一された抽象的な集団へと至る過程のなかに現れているのです (公衆 public、世論 opinion publique、民衆 peuple)。

レチフは、『墮落百姓娘』のなかで、メルシエが『劇場について』という著作の同じ章の冒頭で書いた下記の内容に、直接応答しているように見えます。

フェヌロンが宮廷で初めて民衆 (peuple) について語った作家だったとしても、民衆の教育をとくに目指して創作を行った劇詩人が誰であるかは、私にはわからない。しかし私は、民衆の承認なしに栄光を達成することは不可能だと信じている。[...]「何だって！」と人は言うだろう。「あの群衆 (multitude)、あの百の頭をもつヒュドラ、賞賛にも中傷にもすぐに走り、すぐに騒ぎ、すぐに静まり、うなり、また甘える、そのうえ燃え上がったかと思えば一瞬にして冷めてしまう、そんな奇怪な寄せ集めから支持を得るために骨を折ろうというのか！」と。[...] いかにも完璧とみなされる劇であっても、民衆の身近にありすぎることではない。それどころか、民衆に雄弁に語りかけることなしには、完璧に見えることすらできないだろう。[...] 民衆は形而上学の奥義に通じて

²⁹ [訳注] ルソーが直接民主政が可能な小規模な国家組織を評価していたことと、代表制 représentation を批判したことは「逆説」ではないが、現代の民主政国家の根本である代表制は、集団 (公衆) の理想を実現するためには不可欠な方策であることが「逆説」だということ。

³⁰ [訳注] hiatus : ①個人、②同一の場所に共存する集団、③ (世論の主体としての) 民衆、という三段階には、本来は断絶 (hiatus) があるにもかかわらず、あたかもなめらかに連続しているように見えている、ということ (ルソーが代表制/上演 représentation を批判した背景には、②と③の間のズレへの認識があった?)。

はいないかもしれないが、彼らはどんなイメージも鋭く感知する。彼らはなんらかの関係 (rapports) を見抜くのだ³¹。(メルシエ『演劇について』)

メルシエも同じヒュドラのイメージを用いていましたが、それはこのイメージを否定し、民衆こそが作品の質を判断する唯一の真の審判者であると称えるためでした。怪物のイメージに対して、メルシエはここで、より一般的で無害な民衆の擬人化——すなわち、哲学者というよりも感受性豊かな存在としての民衆への擬人化——を用いています。民衆には、抽象的な議論ではなく、イメージを通じて語りかけるべきだとするのです。ここでメルシエは、民衆の判断に身をゆだねたいという願いと、民衆を「教育したい」という願いとの間で揺れ動いています。

メルシエは、知性には乏しいが感受性豊かな民衆像を示唆するにとどまりません。彼は、『社会契約論』でルソーが提示した、一般意志 (volonté générale) がいかんにして各人と全体に具現されるかという考えをさらに掘り下げています。

すべての知識がこの集団のなかに集められているように思われる。そして実際にそうなのだ。各観客は私人としてではなく公人 (homme public) として判断する。彼は自分の利益も偏見も忘れ、自分に対しても公正である。そして、時が経つにつれて民衆が最も誠実な審判となることは真実である。つまり、各人のなかには、何かしらの識別力があり、それが彼に善を認識させ、感受させるのだ。彼らの理性はたとえ誤謬に覆われていても、そこからひとすじの光が漏れ出し、一瞬にしてすべての誤謬を一掃するようになる。ふだんはこれほど分断されている精神たちも、一堂に会すると、驚くべき強さと的確さを獲得するように見え、それは注意深い者をも驚嘆させ、その理性を困惑させるのである³²。(メルシエ『演劇について』)

メルシエは、私たち各人のなかに「私人 particulier」と「公人 homme public」とを区別しつつ、すべての人間のなかに、公正さ、識別力、理性の一部が備わっており、それによって正しく判断できるのだと述べています。彼はまた、各人と全体においてこの判断を引き起こす「錬金術」の重要性を強調しています。すなわち、公の場に集められることによって、無私、公正、理性が各人のなかで活性化されるのです。メルシエはこのように、「時が経つにつれて民衆こそが最も誠実な審判となる」と語るような、理想主義的かつ楽観的な集団心理学に基づいています。そして、劇作品の美的判断における主権を、もはや専門家や作家ではなく、民衆にゆだねます。これは、ルソーが『社会契約論』で行った主張と同様です。

³¹ Mercier, *op. cit.*, p. 199-200.

³² *Ibid.*, p. 203.

この提案は、集団の知的な力を、各個人におけるその実現に結びつけています。つまり、「民衆＝審判 (peuple-juge)」という隠喩と、「各市民＝審判 (citoyens-juges)」という提喩を統合しているのです。そして、これら二つの修辞技法 (figures de style) と、それぞれが担う概念的なメカニズムとが結びつくことによってこそ、人民主権という離れ業が実現します。メタフトニミー (隠喩的提喩) は、現代政治を表現する中心的な修辞技法となっています。メタフトニミーは、中世においては、国王を国民のイメージであり代表でもある存在 (「王の二つの身体 les deux corps du roi」) とすることによって、君主制を表現していました³³。

もちろん、この提案は現実を理想化して図式化したものです。先述のように、レチフはひどく懐疑的に見えます。彼はより伝統的な仕方でパリの劇場で実際に目にする観客を判断していました。観客たちはますます騒がしくなっていたため、コメディ・フランセーズは1782年に、混乱を抑えるためにひどく窮屈な椅子を設置して平土間の客を着席させる決定を下したばかりでした。メルシエ自身もまた、民衆を「教育する」必要があると示唆し、理性的というより感情的な民衆に対して、作家や学識者が果たすべき教育的役割を軽視することはありませんでした。

さて、同じ時期に、今度は演劇ではなく政治の分野で、類似の議論が交わされることになります。それは、ネッケルの『フランス財政行政論』 (1784年) の刊行によって活発化しました。ネッケルは、5年後に革命の発端となる三部会を招集することになる人物です。すでに財務大臣を務めた (その後更迭されましたが) 経験のあるネッケルは、王政の行政に対して、世論は必要かつ健全な抑制力であると主張します³⁴。しかし、世論は統治を行うわけではなく、単に王権の恣意を制限し、それを正しい方向へ導くものにすぎません。彼はこう述べています。「幸いにも世論にはその権威がある。世論、すなわち国民の声こそが、王たちにその義務を高らかに教えるのである。」また、ネッケルは「世論 (opinion publique) は全体の意見 (opinion de tous) ではない」というきわめて特異な考え方をもっています。彼にとって世論とは、教養ある啓蒙された人々の意見なのです。彼はこう主張します。「世論とこれら一時的な騒動とを混同することは厳に慎まねばならない。[...] むしろ、大臣はそんな騒動を軽蔑することを心得て、真の世論に忠実でありつづけなければならない。それは、威厳のある特徴をそなえた世論、理性と時間、そして感情の普遍性によってのみ立派に作り上げられる世論である。」

³³ [訳注] エルンスト＝ハルトヴィヒ・カントーロヴィチ『王の二つの身体 中世政治神学研究』小林公訳、ちくま学芸文庫、上下巻、2003 (原著刊行は1957年)。「王の二つの身体」という現象が *métaphonymie* 的であるというのは、王が一方で国家を代表する「部分」 (*métonymie*) であり、他方で国家そのものとして象徴化される「全体」 (*métaphore*) という二重の機能を担うから。

³⁴ ネッケルは、とくに自著の最終章で、世論の重要性について主張している。Cf. *De l'Administration des finances de la France*, volume 3, [sans éditeur], 1784, p. 454-459. ネッケルの作品における世論への認識については、次を参照：Léonard Burnand, *Necker et l'opinion publique*, Paris, Champion, 2004.

結論

ヒュドラは、ホップズが用いた無秩序で反乱を起こす民衆を表すイメージでした。ホップズはヒュドラを、制御された力の象徴であるヘラクレスに対立させました（ちょうど、ホップズの聖書に基づく対立、ベヒモス対リヴァイアサン³⁵と同様です）。このイメージが演劇の観客に関する議論に再びもちこまれたことで、群衆の危険な非合理性を考察し、それを飼い慣らし、教育すべきものとして捉えることができるようになりました。

しかしこのイメージは、「公衆 *public*」や「民衆 *peuple*」といった集合的な語の、より一般的な使いかたに基づきつつ、それと対立もしています。こうした語では、個人の行動や思考が当てはめられることがあり、それは一種の言語による自動的な作用による場合もありますが、ときには、集団から一つの統一性や思考が生まれたように見えるためでもあります。集団を一人の人物のようにみなす表現 (*le personnage collectif*) は、平凡と非凡、言語的な反射とイメージによる思考、使い古された隠喩と新たな隠喩の間を漂っているように見えます。

3. 私たちが集団について語る際の表現は、集団の個々の成員を指し示すための、実用的ではあるもののやや曖昧で混乱した提喩 (*synecdoque*) と、集団そのものに意図や思考の統一性を与えるために擬人化する隠喩 (*métaphore*) との間を揺れ動いています。言語のなかにこのような不確かな社会的存在を成立させることによって、隠喩は、個人と集団という緊張関係にある二つの実在を対話させます。また、集団の反応を一個人の反応になぞらえて理解する道を開き、一つの集合的物語 (*un récit collectif*) を作り上げる準備を整えます。そしてその際、歴史の英雄 (公衆 *public*、人民 *peuple*) にして、自己の運命の至高の審判者でもある「超人物 *super-personnage*」が創造されるのです。

もっとも、それには、そのような超越的人物の存在を信じるのが前提となります。ドイツ・ロマン派の人々は「国民 *Nation*」を崇拝すべき現実の存在とみなしましたが、啓蒙思想や革命は、存在論においては唯名論（すなわち、実在するのは個人のみ）に立ち、政治に関しては個人主義（個々人の幸福こそが最も重視される）に立ったため、集団を中間的な状態にとどめました。すなわち、集団は、それを構成する個人とは完全に切り離された存在でもなければ、現実性を欠いた純粋な抽象でもなかったのです。革命直前の時期、とくに劇場の観客に対してなされるメタフトニミーの特有の使用は、まさにこの新たな政治的選択を表現しているのです。

³⁵ [訳注] ベヒモスとリヴァイアサンは、ともに旧約聖書のヨブ記に登場する巨大な獣。ホップズにおいて、前者は無秩序な民衆の暴動や内乱の、後者は絶対的な主権権力（たとえば王権）を象徴。ホップズは『リヴァイアサン』（1651年）で、社会契約によって人々がこの強大な権威を作り出し、無秩序を抑えるべしと主張。